

特集

旭川歴史市民劇

『旭川青春グラフィティ ザ・ゴールデンエイジ』

市民劇で蘇る

若き文化人たちが交錯した

まちの黄金時代

令和元年度 アート選奨

(アート選奨K基金事業)

アートのチカラを考える

さっぽろ大通デザイン・

アートスクール vol.3

レポート

街歩きアート

森と湖に抱かれた阿寒の地に、

新たな表現で蘇るカムイの世界

[釧路市阿寒町]

エッセイ

神田 山陽

表紙作家の紹介

山崎 愛彦

とびから 北の vol.120

令和2年3月



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION



◎特集／旭川歴史市民劇

『旭川青春グラフィティ ザ・ゴールデンエイジ』

市民劇で蘇る 若き文化人たちが交錯した まちの黄金時代

北海道第二の都市・旭川では、開村130年となる2020年の8月に、30年ぶりとなる市民劇が上演されます。日本文化史に名を残す若い才能が、奇跡のように集った大正末期、昭和初期の旭川の歴史を舞台に、演劇の魅力を広く伝えようという試みです。

郷土史家が執筆した 史実をベースとした脚本

歴史市民劇『旭川青春グラフィティ ザ・ゴールデンエイジ』は、詩人の小熊秀雄、画家の高橋北修、歌人の齋藤史、社会活動家の佐野文子など、才気溢れる若者たちが集った時代の旭川が舞台。架空の人物である5人の若者たちが彼らに出会って成長し、自らの生きる意味を見つけていく群像劇です。「物語を創るのは得意ではないのですが、この戯曲の構想はすっと浮かんできた。旭川の歴史が書かせてくれた作品」と、脚本を書いた郷土史家の那須敦志さんは言います。

那須さんは高校生の頃、東京の演劇人からも注目される活動をしていた旭川の劇団「河」の舞台に刺激を受けて、演劇科のある大学に進学しました。卒業後は演劇づ

◎旭川歴史市民劇
『旭川青春グラフィティ
ザ・ゴールデンエイジ』

日時／2020年8月29日(土)・30日(日)

会場／旭川市民文化会館大ホール
(北海道旭川市7条通9丁目)

問い合わせ／実行委事務局
(まちなかぶんか小屋)
☎0166-23-2801

●特集／旭川歴史市民劇
『旭川青春グラフィティ
ザ・ゴールデンエイジ』



2019年2月にキャスト・スタッフの公募を開始し6月にオーディションを実施。高校生から70代まで、約35名が集まりました。7月には理事長が実行委員を務める企業の協力で、ビルの一室に稽古場を開設。札幌などから講師を招いてキャスト・スタッフが演劇を学ぶためのワークショップを実施しました。また、市民と共に旭川の歴史を学ぶ「歴史市民劇セミナー」を開催し、作品の背景となる時代への理解を深めてきました。

次世代に繋がる
旭川の黄金時代

8月の本公演を前にキャストに舞台を体験してもらおうと、



演出の高田学さん。劇団「河」の流れをくむ劇団に参加した1997年以降、旭川での演劇活動を続けてきた

2020年2月、旭川歴史市民劇『旭川青春グラフィティ ザ・ゴールデンエイジ』の「予告編」が上演されました。本編の登場人物を紹介しつつ、二・二六事件や若山牧水の来旭といった、本編には登場しない魅力的な史実を用いて創られた作品です。

演出の高田学さんはこの予告編に、高橋北修の娘で92歳の星野由美子さんを、ご自身の役で舞台に登場させることにこだわりました。「星野さんは劇団『河』の創設メンバーの俳優で、女蟬川と言われた演出家でもあります。星野さんによって歴史が今に繋がりが、未来へと向かうことを伝えたかった」と高田さんは言います。

本公演はさらに参加者を募り、旭川市民文化会館の大ホールで上演します。「若々しい活力が輝いた旭川の黄金時代を、若者を中心とした市民キャストが演じます。旭川の未来に繋がるパワーを、多くの方に受け取ってほしい」と那須さん。本公演に向けた本格的な稽古がいよいよ始まります。

くりから離れ、主に道内で報道番組の制作に関わってきましたが、旭川への転任を機に郷土史を研究するように。また、1960年代末から20年間の劇団「河」の活動をまとめ、著書として出版もしています。

戯曲が完成すると、やはり上演してみたくなった那須さん。旭川の演劇関係者に読んでもらったところ「面白い、ぜひ上演しよう」との声が上がり、市民有志による「旭川歴史市民劇実行委員会」（以下、実行委員会）が発足しました。

市民劇づくりで
演劇シーンを活性化

実行委員会で中心的な役割を担う「まちなかぶんか小屋」は、旭川市の中心部にあるイベントスペースで、まちの活性化と文化振興に一役買っています。2015年からは年に1回、道内各地の演劇ユニットが参加する短編演劇フェスティバル「旭川豆芝居」を実施。また2017年には31年ぶりに再結成した劇団「河」の公演が行われるなど、旭川における



脚本を書いた郷土史家の那須敦志さん。旭川歴史市民劇の総合プロデューサー

演劇の発信・交流拠点として中心的な役割を果たしてきました。

実行委員会のメンバーで、「まちなかぶんか小屋」の企画運営を担当している「まちなかぶんか推進協議会」の有村幸盛さんは、1990年に旭川の開村100年に合わせて上演された市民劇づくりに関わった一人です。

「市民劇の創作はエネルギーが必要で大変でしたが、上演後は劇団がいくつもできるなど、演劇シーンが活性化しました。開村130年での市民劇で、再び旭川の演劇の底上げを図りたい」と有村さん。「歴史をベースにした脚本を市民劇として上演することで、魅力溢れるまちの歴史を広く共有できるし、日頃は演劇に関心のない人にも観てもらえる」とも考えたそうです。



さっぽろ大通デザイン・アートスクール vol.3
レポート

a r t

「ロングライフデザイン」で、これからの暮らしを考える

「さっぽろ大通デザイン・アートスクール」は、暮らしとデザインに携わる方々を講師に招き、デザインをより身近に、暮らしをより深く、考える機会をつくる取り組みです。「東川デザインスクール」を3年前から主催し、デザインやアートを通して地域の文化を発信する道北のまち・東川町と、1954年に羽幌炭鉱鉄道によって建てられた歴史を持つ「大五ビルディング」内のギャラリー大通美術館、そして北海道文化財団の連携によって、2019年6月からスタートしました。

3回目となる2019年12月のアートスクールは、デザイン活動家でD&DEPARTMENTディレクターのナガオカケンメイさんが講師。「ロングライフデザインの考えで、これからの暮らしについて考える」というタイトルで特別講義を行いました。

20年ほど前、早いスピードで消費されるデザインのあり方に疑問を持ったナガオカさんは、ロングセラー商品などの時を超えて長く使い続けられているモノに着目。形状や意匠に留まらず、作られ方や売られ方なども含めた「ロングライフデザイン」を提唱し、ストアスタイルの活動体「D&DEPARTMENT PROJECT (ディアンドパートメントプロジェクト)」をスタートさせました。47都道府県に1か所ずつ拠点をつくることを目指して東京



2019年刊行の「つづくをつくる ロングライフデザインの秘密」(日経BP 刊)



D&DEPARTMENT HOKKAIDOでは、薄く挽いた木のガラス「KAMI GLASS」(旭川市)や、海産物のト口箱を活用したクラフト「ARAMAKI」(恵庭市)などを取り扱う



約1時間の講演は会場からの質疑応答を交えながら行われた

に直営の1号店を構えたのち、初めてのパートナーシップ店となるお店は、ナガオカさんの出身地である北海道に作られています。

2008年、東京のデパートで開催されたデザイン物産展を企画したのをきっかけに、「全国各地のデザインには強烈な個性があると気付いた」と言うナガオカさん。ロングライフデザインはパッケージなど表面的なデザインそのものではなく、「作り手が何をし、何をしなかったのか」という行動と結びついていることを、具体例を挙げながら解説。自身が手がけた商品デザインも例に出しながら「流行に乗らない」「なるべく変えないで新しくする」などの共通項を示しました。そして「ロングライフデザインとは、流行に左右されない。意志を持ったデザイン」であり、使い手も意志を持って買い続けることで文化となる。つまり、正しいデザインは時間が証明してくれるものではないか」と述べました。

さらに、「北海道らしさ」や「札幌らしさ」とは、「東京の真似や他所から持ってきたものではなく、北海道や札幌で長く続いているものを生かす発想を持つこと」が重要であり、「客観的に、北海道らしさ」や「札幌らしさ」を知る必要があるのでは」と指摘。流行りではなくモノの価値に向き合う暮らしや、北海道らしいデザインとは何かを考える上で、ヒントに溢れた講義となりました。

令和元年度 アート選奨 (アート選奨K基金事業)

この人に注目!

北海道文化財団では磯田憲一氏からの指定寄附を基に、アート選奨K基金を創設。本道の芸術文化の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人・団体にアート選奨を贈呈しています。令和元年度を受賞者をご紹介します。



和楽器奏者ユニット 和心ブラザーズ

津軽三味線奏者と和太鼓奏者、4名によるユニットです。「和楽器の進化」をテーマに、伝統を受け継ぎながらも現代に生きた音楽を伝えることを目指し、多種多様な音楽の創作と演奏活動を行っています。

2005年、津軽三味線奏者の新田昌弘さんと和太鼓奏者のしんたさんによって結成され、国内だけではなく、サウジアラビア、スペイン、トルコ、アメリカなど世界20カ国で演奏を重ねてきました。2017年からは津軽三味線奏者の菅野優斗さん、和太鼓奏者の田村幸崇さんがユニットに参加。厚みと華やかさを増した演奏が好評を得、全道各地で行われたコンサートでは、各会場で記録的な集客数となりました。また、メンバーはARASHI LIVE TOUR 2015 Japonismに和太鼓隊として出演、津軽三味線全国大会で何度も優勝を獲得するなど、若手ながらも実力派の奏者として知られています。

学校や施設へのアウトリーチやワークショップも積極的に行うなど後世の育成に努めるほか、道内各地で和楽器の魅力伝える演奏活動を続けています。



民衆史研究家 石川圭子

一級古民家鑑定士として古民家の保存・活用を行うプロジェクトに関わり、古い建物が持つ地域の記憶への関心から民衆史研究家となった石川圭子さん。2013年、札幌の歓楽街・すすきのにある芸者置屋だった古民家に惚れ込んで家主を説得し、「ギャラリー&レンタルスペース鴨々堂」をオープンしました。

石川さんは鴨々堂の店主として、すすきのや中島公園など周辺地域の歴史や文化を伝える講座を実施。また、2014年からは周辺の寺院やホテルと連携し、お座敷踊りや日舞、野点、細工物の体験など、日本古来の文化を経験する地域振興イベント「鴨々川ノスタルジア」を立ち上げ、地域文化の発信に努めました。

「古民家は、かつての地域の様子を伝える媒体であると共に、地域のアイデンティティを伝える手段となるもの。また、今の社会のありようを省みるものでもあります」と石川さんは言います。

築90年以上となり、老朽化が進んだ鴨々堂は2019年10月で役割を終えました。古材の一部は奈井江町の道の駅内の「待合処鴨々堂」に用いられ、往時の面影を蘇らせています。





阿寒湖畔エコミュージアムセンター

阿寒摩周国立公園のうち、阿寒湖を中心とした地域の自然に関するガイダンス施設。湖と周辺の森の成り立ちや動植物について、床面の1000分の1の鳥瞰図をたどりながら知ることができる。遊覧船が運休する冬期、研究用のマリモを展示。阿寒湖のマリモが間近で見られるほか、周辺の自然解説も行っている。近隣の森には遊歩道が整備され、湖畔のポッケ(泥火山)までは徒歩10分ほど。また、冬期はスノーシュー(貸出あり)での水上散策も楽しめる。

☎0154-67-4100 9:00~17:00 火曜休
<http://business4.plala.or.jp/akan-eco/>



カフェ&ギャラリー KARIP (カリブ)

彫金家・下倉洋之さんは「Ague(アゲ) Art jewelry」としてアクセサリーを制作。ヒグマの手をリアルに表現したリング「キムンカムイ」など、自然への敬意に基づくデザインで新たなアイヌ工芸を創り出している。2019年5月にはコーヒー好きが高じて工房内にカフェ「KARIP(カリブ)」をオープン。アイヌ語で「輪」を意味し、人の縁がつながる場所になりたいという思いが込められている。炭火でじっくり自家焙煎した豆で淹れる、こだわりの一杯が味わえる。

☎0154-64-1728 11:00~17:00 不定休



「アイヌ古式舞踊」は必見。(上)女性による「黒髪の踊り」は「ロストカムイ」にも取り入れられている演目のひとつ。ほかに(右)「鶴の舞」、(中)男性による「弓の舞」など日替わりで公演。(下)「ロストカムイ」は音楽、映像、振付に気鋭のクリエイターを起用。クラブミュージックやデジタルアート、ダンスに関心の高い若い世代も多く訪れている



釧路市阿寒町阿寒湖温泉4丁目7-84 ☎0154-67-2727 休館日:不定休
観覧料:「アイヌ古式舞踊」「イオマンテの火まつり」
当日券 大人1200円(前売券1080円)、小学生600円
「ロストカムイ」 当日券 大人2200円(前売券1980円)、小学生600円
特等チケット(2公演の観覧セット券) 大人2800円(前売2600円)、小学生料金なし
※各公演予定は「阿寒湖アイヌコタン」ホームページ<https://www.akanainu.jp>で要確認
<https://www.akanainu.jp/lostkamuy/>(ロストカムイ)
※3月以降の公演は未定。HPなどで要確認

森と湖に抱かれた阿寒の地に、 新たな表現で蘇るカムイの世界

雄阿寒岳と雌阿寒岳がそびえる雄大な景色と温泉を求め、観光客で賑わう阿寒湖畔。その一角に、アイヌ工芸家の工房やショップが立ち並ぶ「阿寒湖アイヌコタン」があります。昭和30年代、おもに道東のアイヌ工芸家が集まったことで、アイヌ文化の発信拠点となりました。木彫や刺繍などのお土産品だけでなく、現在は、伝統に基づいたデザインやアート作品も積極的に制作。新たなアイヌ文化の表現として評価が高まっています。



伝統と最新が共存する舞台 阿寒湖アイヌシアター「イコロ」

2012年、国内初のアイヌ文化専用劇場として阿寒湖アイヌコタンにオープン。国の重要無形民俗文化財でユネスコ世界無形文化遺産の「アイヌ古式舞踊」、また「イオマンテの火祭り」といった伝統的な祭りの再現を上演し、アイヌ文化を継承・発信しています。

加えて2019年から、アイヌ古式舞踊とコンテンポラリーダンス、デジタルアートなどを融合させてアイヌ文化を現代的に表現した舞台「ロストカムイ」がスタートしました。「ロストカムイ」はアイヌの口承文芸「ユーカラ」を踏まえつつ新しく創作したストーリーで、阿寒ユーカラと名付けられています。

国内外で活躍するクリエイターとともに脚本や演出に携わった床州生(とこ しゅうせい)さんは、「今まで見たことのないユーカラを作りたかった」と言います。州生さんの父・床ヌブリさんは、ユーカラを題材にアートとして木彫を制作し、ユーカラ劇の演出も手がけるなど、新たな方法でアイヌ文化を残そうとした一人でした。州生さん

も同じ思いを持ち、新しい表現で文化を伝え残そうとしています。

「ロストカムイ」で描かれるのは、開拓が始まった明治時代以降の、アイヌが特別な神としてきたホロケウカムイ(エゾオオカミ)の絶滅というテーマです。「天から役目なしに降ろされた物はひとつもない」というアイヌの言葉に象徴される、アイヌ文化の精神性や考え方が投影されており、「なぜ、アイヌが大切にしていたエゾオオカミがいなくなったのか。この地から大切なものが失われていくことをどう考えるか」という問いを投げかけています。

ストーリーを支えるのは、阿寒の風やポッケ(地底から噴き出す熱い泥)など自然の音に古式舞踊などをリミックスしたサウンド。そしてCGによるデジタルアートと、トップダンサーの振付によるコンテンポラリーダンスです。スタイリッシュで、今まで見たことのないアイヌの世界を体感できます。

A K A N

「人生、生きるに値するか——生き甲斐は確かにある」映画『マンハッタン』のセリフである。様々に行き詰まった男（ウッディアレックス）は、独り矢場に【ソレ】を云い立てる。「グルーチョヨマルクス、木星の第二楽章、セザンヌの林檎と梨……トレイシーの顔」

【ソレ】とは何か。生き甲斐と訳してあるが——つまり、愛するものの事。翻って、それを並べる作業は、自信を失って今にも消えそうな心中の火種を励ます最後のラフソディである。

【ソレ】の根には、育った環境が影を落とす。私は北海道の端での日常と時代と、味覚や他人様や劣等感に揉まれて気質が醸されたのだが。もし、パレスチナだったら。何を【ソレ】とし、何を悪と見ただろう。中国だったら、生まれた年に文化大革命が始まり、天安門事件は入門した年。言論弾圧に耐えられたか。否々、例えば今オリンピック反対と云う【講談】が日本にあるのか。逃げるな。待て。私にあるのか、なのだ。



ともあれ平和ボケのうちに、惑うた若僧は鈍らな中年になってしまった。頓悟極まらず、達観は程遠く、気づけば世間は虫の好かないモノで溢れている。人生、生きるに値するか——。

円空の人麻呂像、良寛詩生涯身立、鈴木清順ツイゴイネルワイゼン、セバスチャンサルガドのアフリカ、共働学舎の桜の花の付いたチーズ、デュシャンの遺作、蕪村の花見又平、脳内ニューヨークのリトルパーソン、マレークベロニカのラチとらいおん、仙厓の寒山拾得、鯀巴壘、山下清群鶏、ブラックピノキオプロジェクト、池田屋「甕口」——。



神田山陽 (かんださんよう) 講談師
北海道生まれ。今夏NPOじっとく設立。物々交換講談を実行中。Eテレ「にほんごであそぼ」等出演中

表紙作家の紹介



ゴーレムのある入れ子

山崎 愛彦 美術家
Yoshihiko Yamazaki

1994年 札幌生まれ
2016年 札幌大谷大学 芸術学部 美術学科 造形表現領域 絵画分野 卒業
2020年 北海道教育大学 大学院 教育学研究科 教科教育専攻 美術専修 修了

- | | |
|---|--|
| <p>[個展]</p> <p>2014年 ギャラリーえん (札幌)</p> <p>2016年 ギャラリー創 (札幌)</p> <p>2017年 TOOVcafe (札幌)</p> <p>2019年 ギャラリー創 (札幌)</p> <p>[グループ展]</p> <p>2016年 北海道作家作品展「2020 - 来たるべき者達 -」 札幌クロスホテル (札幌)</p> <p>2018年 「開館50周年記念 リニューアル記念 mima, 明日へのアーティストたちとともに」 北海道立三岸好太郎美術館 (札幌)</p> | <p>2018年 「shelf life」 OOTE41221 (長野)</p> <p>2018年 JR タワー・アートプラネッツ・グランプリ2018 プラニスホール (札幌)</p> <p>2019年 「冬のセンバツ」 ~美術学生展~ 札幌大通地下ギャラリー500m美術館 (札幌)</p> <p>2019年 「Nameless Landscape」 札幌文化芸術交流センター SCARTSコート (札幌)</p> <p>2019年 さっぽろアートステージ2019「まなざしのスキップ」 札幌文化芸術交流センター SCARTSモール (札幌)</p> <p>2019年 さっぽろアートステージ2019 「出張シンクスクール『制作コース歴代受賞者展』」 札幌地下歩行空間 (札幌)</p> |
|---|--|

◎北海道文化財団アートスペース企画展 vol.43
山崎愛彦個展「矢印の輪切りいくつか見る」
会期：2020年2月27日(木)～5月29日(金) 9:00～17:00
休館日：土・日・祝日
※都合により臨時休館する場合があります。
会場：北海道文化財団アートスペース (札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)
入場料：無料



希望の大地の戯曲賞〈北海道戯曲賞〉受賞者決定

次代を担う作家や優れた作品を発掘して、本道の演劇創作活動を活性化しようと全国に門戸を開いている北海道戯曲賞。今年度は全国から133本(過去最多)の応募があるなど、道内外の作家が互いに競い合いましたが、審査員の皆さんが議論を重ねた結果、大賞は該当作品がなく、優秀賞に『さなぎ』(本橋龍/東京都)と『Share シェア』(霧島ロック/東京都)の2作品が選ばれました。

◎ 大 賞 該当作品なし

◎ 優 秀 賞 (賞金5万円/記念楯)

『さなぎ』

作:本橋 龍(東京都)



【受賞者プロフィール】

1990年生まれ。さいたま市出身。高校の部活にて演劇を始める。その後入学した尚美学園大学で演劇を学ぶが、2013年に大学を中退。実家から家出し、そこから自身の創作ユニット「栗☆兎ズ」で劇作活動を本格的に始める。2016年、江古田に居住し活動の拠点である「栗☆兎ズ荘」(木造二階建ての一軒家。後のウングヱ荘)を構える。8回の演劇公演を経て、ユニット名をウングヱツォーファに改名。上演作品『動く物』が平成29年度北海道戯曲賞にて大賞を受賞。

創作の特徴はリアリティのある日常描写と意識下にある幻象を、演劇であることを俯瞰した表現でシームレスに行き来することで独自の生々しさと煌めきを孕んだ「青年(ヤング)童話」として仕立てること。

『Share シェア』

作:霧島ロック(東京都)



【受賞者プロフィール】

大学在学時に演劇部に所属。役者として活動を始める。地元の関西から東京に居を移した後は、小劇場を中心に舞台出演を重ね、2005年「ここかしの風」の旗揚げ公演に参加し、以降ほぼ全作品に出演。2015年より、役者のみならず、作・演出も担当するようになり、2019年に「ここかしの風」から「ここ風」に改名した現在も、同団体の活動を基軸に、他団体への客演も積極的に行っている。所属事務所エクリュでは、主にCMナレーション他、映像作品など、役者として舞台以外の方面でも、多く活動している。

◆最終審査員(五十音順)

桑原 裕子(KAKUTA主宰)

斎藤 歩(札幌座チーフディレクター)

土田 英生(劇作家・演出家・俳優/MONO代表)

長塚 圭史(阿佐ヶ谷スパイダース主宰)

前田 司郎(作家・劇作家・演出家・映画監督/五反田団主宰)

※受賞作品及び審査員の選評は、北海道文化財団ホームページ<http://haf.jp/>で公開しています。